

真実を知ってください

LSD

エル・エス・ディー (リゼルギン酸ジエチルアミド)

drugfreeworld.org

アシッド
ボット
47
アクト
ット

この小冊子が 制作された理由

街中や学校、あるいはインターネットやテレビの中で、薬物についてのさまざまな情報が氾濫しています。その中には正しい情報もありますが、そうでないものもあります。

そうした薬物情報の多くは、売人によって広められたものです。今では更生したかつての売人は「薬物を買ってもらうためなら、どんな嘘でも言っていた」と証言しています。

そのような情報にだまされないでください。薬物乱用という罠を避けるためには、事実を知る必要があります。この小冊子はそのために制作されたものです。

この小冊子をお読みになった上で、皆様のご意見やご感想をウェブサイト **drugfreeworld.org** から、またはEメール **info@drugfreeworld.org** までお寄せください。

LSDとは？

LSDは最も強力な幻覚剤のひとつです。それはライ麦やその他の穀物に寄生する「麦角（ばっかく）」と呼ばれる菌の中に含まれる化学物質、リゼルギン酸から作られます。

LSDは主にアメリカ合衆国内の密造工場で、結晶の状態で生産されます。このようにしてできた結晶は液体に加工され、販売されます。LSDは無臭、無色で、わずかに苦い味がします。

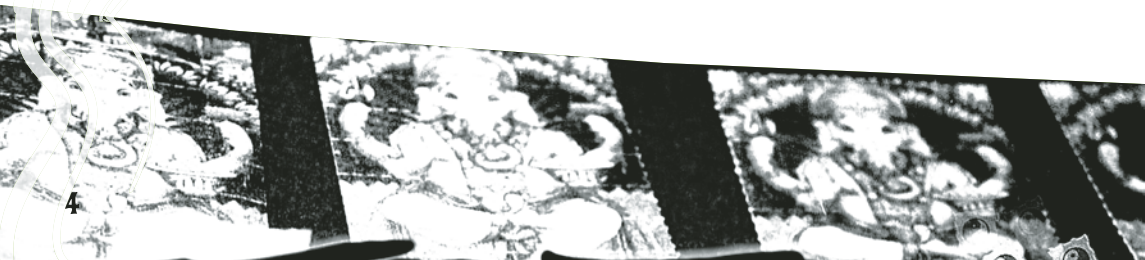
LSDは「アシッド」を始めとする多くの通称で知られており、小さな錠剤（マイクロドット）やカプセル、あるいは四角いゼラチン（ウインドウ・ペーン）として売られています。LSDは吸水性のある紙に吸収させて販売されることもあります。その場合この紙は小さな四角い紙片に分けられ、模様やマンガ

のキャラクターが描かれています。また、液状で売られることもあります。しかし、どのような方法で摂取するかに関係なく、LSDは使用者を、現実世界からの遮断という深刻な作用へと導きます。

LSDの使用者はLSDによる体験を「トリップ」と呼び、これは通常12時間ほど続きます。忌まわしい害を及ぼす反応は、その生き地獄のような苦しみにもふさわしく「バッド・トリップ」と呼ばれています。

LSDの通称

- エル
- 紙 (かみ)
- ペーパー
- アシッド
- バッテリー・アシッド
- ブーマーズ
- ドーズ
- ドッツ
- ヒッピー
- ルーニー・トゥーンズ
- ペーン
- スーパーマン
- タブ
- ゴールデン・ドラゴン
- ウィンドウ・ペーン
- イエロー・サンシャイン
- ゼン
- マイクロドット



「16歳の時にはじめてドラッグをやって、3年以上もLSDを乱用していたんだけど、その頃はLSDが最悪の幻覚剤だというのは知らなかったの。

私が使っていたのはブロッターって言って、LSDが1ミリ四方の小さな紙に浸されているやつだった。その紙を舌に乗せると、15分ほどで全身が熱くなって汗をかき始めた。

やっている間、瞳孔が開いたり、吐き気をもよおしたり、『鳥肌』が立ったりもした。LSDで『ハイ』になっている時は、心と体に大きな歪みがあるように感じた。気分や目に映るものが大きく変わって、何だか変なとても怖いトリップだった。自分の心と身体がコントロールできなくなったような感じだった。」— エディス

幻覚剤とは？

幻覚剤は、幻覚を引き起こす薬物です。この種の薬を使用すると、現実には存在しないものが非常に鮮明に見えたり、聞こえたり、感じられたりします。幻覚剤の種類によっては、それを使用する人の気分に変動的で予測できない変化を生み出すものもあります。

LSDの危険性とは？

LSDの影響は予測できません。その作用は、摂取量、その人の気分や人格、そして薬物が使用される周囲の環境によっても変わります。それはさいころの目で決まるようなものです。目くるめくような、ゆがんだ陶酔感を味わうか、または被害妄想*的なひどい落ち込みを味わうかのどちらかです。

通常LSDは、摂取してから30分から90分で最初の効き目が現れます。多くの場合、瞳孔が開きます。体温は高くなる場合も、低くなる場合もあります。血圧と心拍数も上がる場合と下がる場合があります。また発汗や悪寒が起こることも珍しくありません。

LSDを使用していると、食欲の減退や不眠、口内の乾燥、震えをしばしば経験します。より一般的な作用としては視覚の変化があります。LSDを使用している人は特定の色の強さに固着するようになります。

同時に、気分が極端に変化し、現実感を失った「恍惚感」から強烈な恐怖感まで、あらゆる気分を経験します。その最悪な面として、LSDを使用している人は薬物によって引き起こされた感覚と現実の感覚を区別することができません。

LSDの使用者の中には、自分が経験した極端な恍惚感を「悟り」と勘違いする人もいます。

そういった人たちは人生の通常の活動から切り離され、また同じ感覚を再び経験するために、この薬物をもっと取り続けたいという衝動を感じるのです。また、LSDを取っている間に苦痛と恐れに満ちた考えや気分、自制心を失うのではないかという恐怖、狂気と死への恐れ、そして絶望感を経験する人もいます。「バッド・トリップ」が起こることもしばしばで、これはいったん始まると止むことがなく、12時間以上も続く場合があります。

* 被害妄想：他人に対して根拠のない疑い、不信任、恐れを抱く状態のこと。

事実、中にはLSDによって引き起こされた精神異常から回復することのできない人々もいます。

LSDを大量に摂取すると、妄想や幻視を引き起こします。LSDを使用すると、時間と自己に対する感覚が変わります。物体の大きさや形はゆがんで受け止められ、その動きや色彩、音もゆがめられます。触覚や通常の身体感覚までもが、奇妙で突飛なものに変わります。感覚は「重なり合う」ような感じになり、その人は色を「聞いたり」、音が「見えたり」するように感じる場合があります。これらの変化は恐ろしく、パニック状態を引き起こすことがあります。

また、分別のある判断を下す能力や、普通に危険を感じる能力が損なわれます。LSDを使用している人は、地面を「もっと近くで見る」ために窓を飛び越えようとすることがあるかもしれません。夕焼けをうっとり眺めながら、交通量の多い交差点の真ん中に立っている

ことに気付いていない場合もあります。

LSDを取ったことのある多くの人が、かなり後になって、何の前触れもなく「フラッシュバック」、つまりLSDの幻覚症状の再現を経験しています。

「バッド・トリップ」とフラッシュバックは、LSDを用いる危険性のごく一部に過ぎません。LSDを使用する人は、比較的長期にわたって精神異常の兆候を示したり、深刻なうつに陥る場合があります。

LSDは体内に蓄積されるため、使用する人には薬物に対する耐性ができてしまいます。つまり、常用者は「ハイ」になるためにますます多くの量を摂取しなくてはならなくなるのです。それにより身体にますます悪影響があるだけでなく「バッド・トリップ」の危険性をも高め、精神異常を引き起こしかねません。

「アシッドをやった後、
大型トレーラーに
正面から突っ込んで死ぬと
いう幻覚を見た。キーッと
いうブレーキの音がして、
それから真っ暗で不吉な静寂
に包まれた。ものすごい恐怖
感。本当に死んだと思った。…
それから1年、怖くて墓地には
行けなかった。そこに自分の
墓があったらどうしようと
思って。」— ジェニー

LSDは、しばしば紙片（下）に
浸された形で摂取され、状態の
激しい変化や人格の分裂、
絶望感を引き起こします。
「バッド・トリップ」はしばしば
起こり、時には12時間以上も
続くことがあります。



「13歳の時に初めてお酒を飲み、
そのすぐ後にマリファナを勧め
られました。それからすぐにLSDに手を
出し、中毒となってしまいました。それを
まるでアメをなめるように口にしていま
した。

ある飲み会の晩、私は気を失いました。
気が付くと顔は血だらけになっていて、
口からもどしていました。私は奇跡的に
意識を取り戻し、身体を洗いました。
車に乗り込み、震えながら両親の家へと
車を走らせました。母と一緒にベッドに
もぐり込み、泣きました。

21歳の時、最初のリハビリに入り
ました。」— ドナ



LSDの有害な作用

身体への作用

- 瞳孔拡大
- 体温の上昇または下降
- 発汗または悪寒（鳥肌）
- 食欲不振
- 不眠
- 口内の乾燥
- 震え

心への作用

- 妄想
- 幻視
- 不自然な多幸感や確信
- 時間と自己に対する
感覚のゆがみ
- 深さへの知覚が損なわれる
- 時間への知覚が損なわれる
物体の大きさと形、動き、色、
音、感触のゆがみ
使用者自身の身体に対する
知覚のゆがみ
- 思考や気分が深刻な恐怖感
に襲われる
- 自制心を失うことへの
恐れ
- パニック発作
- 「フラッシュバック」
LSD摂取後に何の前触れ
もなく起こるLSDによる
幻覚症状の再現のこと。
- 深刻なうつ、または
精神異常



「15歳でお酒を覚え、次にエクスタシー、
覚せい剤、コカイン、そしてLSDに
まで手を出すようになりました。

仕事を続けることができなくなり、
憂うつになり、薬物依存を克服すること
なんてできないと思いました。私は大量に
薬を飲み、2度も自殺を試みました。
それから精神科医の下でさらに多くの
薬物、抗うつ剤、精神安定剤を与えられ、
状況はさらに悪化しました。

私は自分の感情のはけ口として、自分
自身を傷つけるようになり、体を切ったり、
焼いたりし始めたのです。」

— ジャスティン

国際的な統計

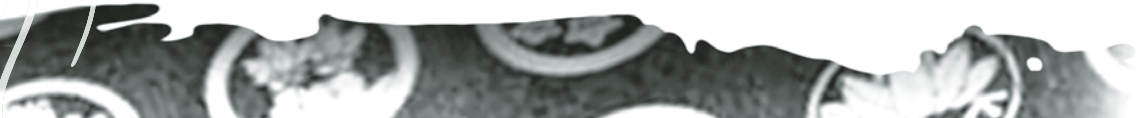
ヨーロッパでは、15歳から24歳の人々の4.2%がLSDを使用した経験があります。アンケート調査によると、この年齢層で過去1年間にLSDを取ったことがある人の割合は、7ヵ国（ブルガリア、チェコ共和国、エストニア、イタリア、ラトビア、ハンガリー、ポーランド）で1%を超えています。

アメリカ合衆国では、1975年から国立薬物乱用研究所の助成により、薬物使用の動向を知り、薬物乱用に対する生徒の態度や考えを知るために、全国の1万7000人近くの高校生に毎年アンケートを行っています。1975年から1997年までの間に、LSDの使用が最も少なかったと報告されたのは1986

年でしたが、この時でも高校生の7.2%が少なくとも1度はLSDを使用したことがあると報告されています。

過去1年の間にLSDを使用したことがあると報告した高校生の割合は、最低の数値を示した1985年の4.4%から、1997年には8.4%と2倍近くに増えています。また1997年には、高校3年生の13.6%がLSDの使用経験があると回答しました。

2008年1月に発表された調査結果によると、アメリカ合衆国では12歳から25歳までの年齢層のうち、約310万人がLSDの使用経験があると述べていることがわかりました。



LSDの強さ

LSD: 最も強力な幻覚剤

LSDの強さは
マジック・
マッシュルームの
100倍です。

LSD
100倍

マジック・
マッシュルーム

LSDの強さは
メスカリンの
4000倍です。

LSD
4000倍

メスカリン

「**ス**トリップ劇場やカジノに頻繁に通い始め、乱れた生活をするようになっていた。そして売春宿をはしごし、すぐに他の薬物に手を付けるようになった。

相続した財産をすべて失い、そしてクラックの密売所へと移り住んだ。1年間、そこで人々が死ぬのを見て過ごした。仕事を失い、盗みを働くようになった。

2003年11月にハイジャックを試みたために逮捕され、刑務所に入った。

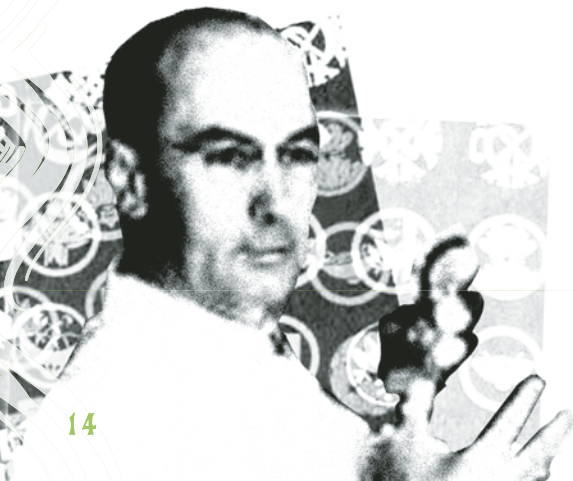
自分を愛してくれていたすべての人たちを傷つけ、彼らを失い、そして家をも失ってしまったんだ。」 — フレッド

LSD : その歴史

サンドズ製薬に勤務していた化学者アルバート・ホフマンは、スイスのバーゼル（スイス北西部の都市）で血液の活性剤の研究中に、初めて

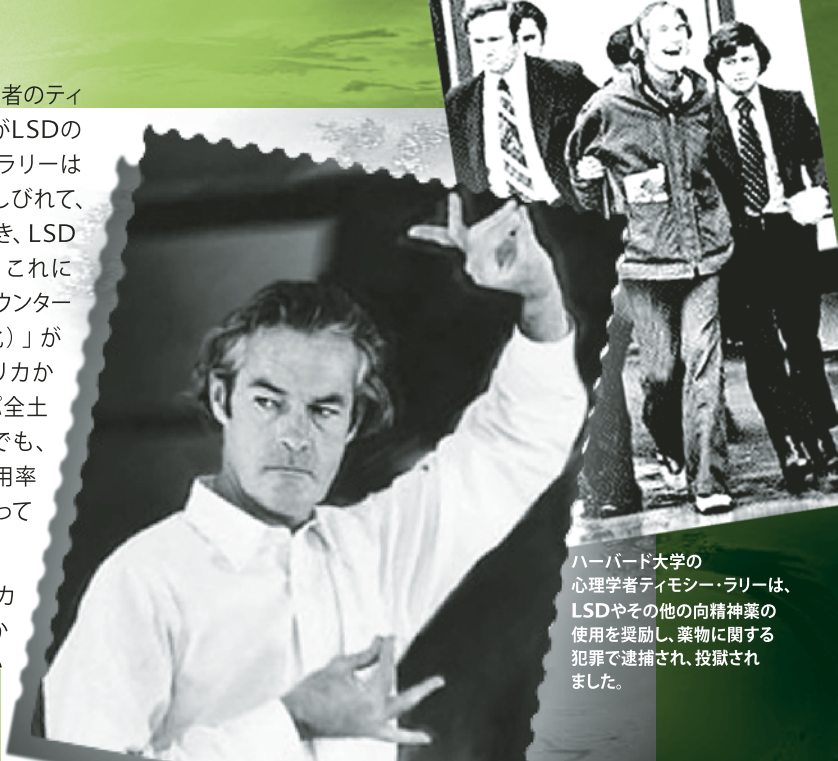
LSDを合成しました。しかしその幻覚作用については、1943年にホフマン自身がLSDを偶然服用するまでは知られていませんでした。後になってわかったことは、わずか25マイクログラム（塩の数粒と同量）を口から取るだけで、鮮明な幻覚作用を作り出すことができるということでした。

LSDは、脳内に存在する化学物質に類似しており、またその作用がいくつかの点で精神病に類似していることから、1940年代から60年代にかけて精神科医たちによって実験に用いられました。研究者たちはこの薬物にどのような医療上の用途も見つけることはできませんでしたが、サンドズ製薬によって実験のために支給された無料のサンプルが広範囲に配布されたことにより、多くの人がこの薬物を用いるようになりました。



1960年代に入り、心理学者のティモシー・ラリーといった人がLSDの名を世間に広めました。ラリーはアメリカの学生たちに「しびれて、目覚めて、抜け出せ」と説き、LSDの使用を奨励しました。これによって薬物乱用という「カウンターカルチャー（反体制文化）」が確立され、LSDはアメリカから英国、そしてヨーロッパ全土へと広まりました。今日でも、英国におけるLSDの使用率は世界のどこよりも際立って高くなっています。

1960年代のカウンターカルチャーはLSDを現実から逃避する手段として用い



ハーバード大学の心理学者ティモシー・ラリーは、LSDやその他の向精神薬の使用を奨励し、薬物に関する犯罪で逮捕され、投獄されました。

CIA Infiltrated 17 Area Groups, Gave Out LSD

Suicide Revealed

By Thomas D. Clancy
Washington Post Staff Writer

A leading employee of the Department of Defense admitted that LSD was part of a Central Intelligence Agency test program at 17 places in the United States and abroad, according to the Washington Post Staff Writer.

The test was given the drug while studying a meeting with CIA personnel led to a test project that involved administration of mind-bending drugs, according to a source and the testing of a planning device by an anti-aircraft group who were unaware they were working.

The individuals who were given LSD were given the drug as part of a test project that involved administration of mind-bending drugs, according to a source and the testing of a planning device by an anti-aircraft group who were unaware they were working.

District the Focus

By Bill Richards
Washington Post Staff Writer

Agents working for the CIA were reported to participate and monitor at 17 Washington area centers in testing from the Black Panthers, Washington Ethical Society, and the Communist Party, according to the Washington Post Staff Writer.

Washington became the focus of CIA surveillance of anti-war and political groups during a time when protest demonstrations were being given to the CIA's anti-war efforts.

The Agency's report was given to President John F. Kennedy in 1964, according to a source.

LSDとその他の幻覚剤に焦点を当てた、精神医学によるマインド・コントロールのプログラムは、一世代にわたるLSD常習者を生み出しました。

June 1975

Report to the President by the COMMISSION ON CIA ACTIVITIES WITHIN THE UNITED STATES



ましたが、西側諸国の諜報機関と軍は、この薬物を化学兵器としての可能性があるものと見なしていました。1951年、こうした組織が一連の実験を開始しました。アメリカ合衆国の研究者たちは次のように記しています。「LSDにより、軍隊など、人々の集団全体を周囲の環境や状況に対して無関心にし、何かを計画することや判断を下すことを妨害できる。また不安やコントロール不能な混乱、そして恐怖さえもつくり出すことができる。」

LSDを用いて、諜報機関の標的となった人々の人格を変え、ひいてはすべての人々をコントロールできるかどうかを見る実験が行われました。こうした実験は、1967年にアメリカ合衆国で正式にこの薬物の使用が禁止されるまで続けられました。

LSDの使用は1980年代に下火になりましたが、1990年代には再び取り上げられるようになりました。LSDは1998年から数年間、十代後半から20代前半の若者によってクラブやパーティーなどで広範囲に乱用されましたが、2000年頃にこの薬物の使用は大幅に減少しました。

「LSDを服用する前から、
不安やコントロール不能な
混乱がはじまりました。
『トリップ』してか
ら、さらに4～5回頻繁に
服用するようになりました。」

「薬物を取るたびに、現実世界から
遠ざかり、最終的には自分自身の
皮膚感覚が感じられなくなる
までになったのです。」

— アンドレア

薬物の売人がよく使う誘い文句

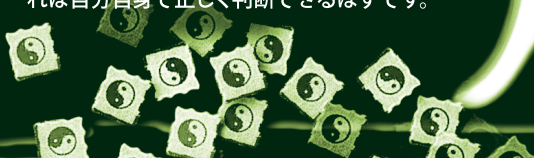
十代の若者へのアンケートによると、薬物に手を出すようになったそもそもの理由として、55%が「周りの雰囲気流された」と回答しています。彼らには「ダサイ」と思われたくない、カッコよく見られたい、という願望があります。薬物の売人はそのことをよく承知しています。

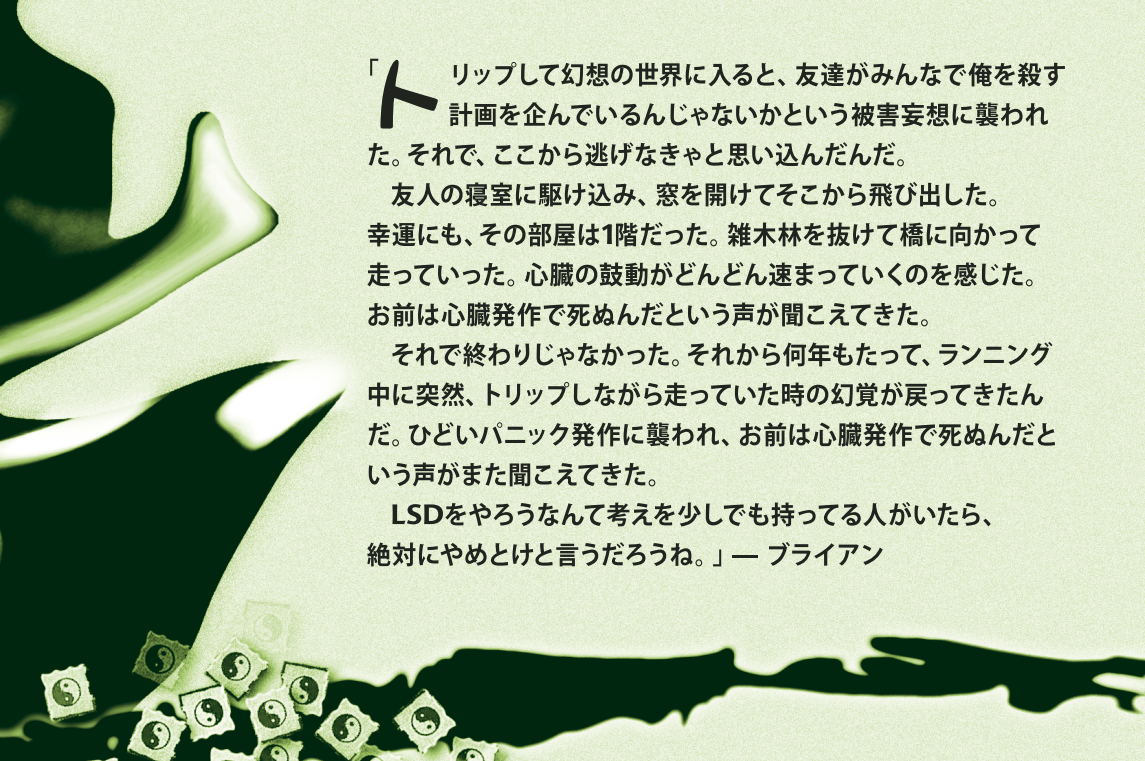
売人たちは、友達のような顔をして近付き、親切を装って「いい気分になれるもの」を教えてあげると持ちかけてきます。その薬物を使うと「周囲から浮いてると思われなくなる」とか「仲間の中で目立てる」というのです。

薬物の売人はお金だけが目当てです。薬物を買ってもらうためなら、どんな嘘でも言います。例えば「LSDをやると自由な世界が開ける」などと言ってくるでしょう。

売人は「お客さん」が払うお金にしか関心がありません。薬物のせいでその人の人生が台無しになっても気にしません。かつての売人たちは、薬物を買う人を「いいカモ」としか見ていなかったと証言しています。

薬物についての真実を知ってください。そうすれば自分自身で正しく判断できるはずです。





「トリップして幻想の世界に入ると、友達がみんなで俺を殺す計画を企んでいるんじゃないかという被害妄想に襲われた。それで、ここから逃げなきゃと思い込んだんだ。

友人の寝室に駆け込み、窓を開けてそこから飛び出した。幸運にも、その部屋は1階だった。雑木林を抜けて橋に向かって走っていった。心臓の鼓動がどんどん速まってくのを感じた。お前は心臓発作で死ぬんだという声が聞こえてきた。

それで終わりじゃなかった。それから何年もたって、ランニング中に突然、トリップしながら走っていた時の幻覚が戻ってきたんだ。ひどいパニック発作に襲われ、お前は心臓発作で死ぬんだという声がまた聞こえてきた。

LSDをやろうなんて考えを少しでも持ってる人がいたら、絶対にやめとけと言うだろうね。」— ブライアン

薬物についての真実

薬物は基本的に毒です。その作用は、摂取する量によって決まります。

少し摂取すると、活動をより活発にする中枢神経刺激剤として作用します。多めに摂取すると、活動を抑制する鎮静剤として作用します。さらに多量に摂取すると毒となり命を奪います。

これはどの薬物にも当てはまります。こうした作用を引き起こすのに必要な量に違いがあるだけです。

それだけではなく、多くの薬物には人の心にも影響を及ぼす弊害があります。薬物を取っている人が自分の周囲で起こっていることを知覚しても、それは歪んだものになってしまう可能性があります。その結果、その人の行

動は奇妙だったり、不合理であったりするかもしれません。暴力的になることもあるでしょう。

薬物はすべての感覚を遮断します。望ましい感覚も望ましくない感覚もです。そのため、短期的には痛みを和らげるために役に立ちますが、同時に人の能力や機敏さを消し去り、思考を不明瞭にします。

医薬品は、身体の働きを良くしようとして、何かを速めたり、遅くしたり、身体の働きを変えることを意図した薬物です。時には必要ですが、薬物であることに変わりはありません。中枢神経刺激剤や鎮静剤といった薬物を取り過ぎれば命を落とすこともあります。したがって、医薬品は規定通りに使用されない場合、違法薬物と同様に危険なものになり得ます。

本当の解決策は、
事実を認識し、最初から
薬物など使用しないことです。



なぜ人は薬物を取るのでしょうか？

人が薬物を取る理由は、自分の人生を変えたいと思うからです。

若い世代の人たちが薬物を取る理由には、次のようなものがあります。

- 周りとうまくやっていきたい。
- 問題から逃避するため。
- リラックスするため。
- 退屈を紛らわすため。
- 大人になったような気がするから。
- 反抗するため。
- どんなものが試してみたい。

こういった若者は、薬物が問題を解決してくれると思っているのです。しかし、結局のところ薬物は問題にしかありません。

自分の問題に直面することが困難なこともあるでしょう。しかし薬物を使用した結果は、その薬物によって解決しようとしている問題よりも常に悪いものとなります。本当の解決策は、事実を認識し、最初から薬物など使用しないことです。



参考文献

European Monitoring Centre for
Drugs and Drug Addiction 2007
Annual Report

国連薬物・犯罪事務所
LSDに関する報告書 1998 年

U.S. Department of Justice,
National Drug Intelligence
Center report, May 2003

U.S. Drug Enforcement
Administration

“Research Report Series—
Hallucinogens and Dissociative
Drugs,” U.S. National Institute
on Drug Abuse

U.S. Office of National Drug
Control Policy report on
Hallucinogens, September 2005

*Acid Dreams: The Complete
Social History of LSD—The
CIA, the Sixties, and Beyond*,
Martin A. Lee and Bruce Shlain,
Grove Press, (revised edition),
March 1986

www.drogues.gouv.fr.
(Website of the
French Government’s
Interdepartmental Mission for
the Fight Against Drugs and
Drug Addiction)

Hopkins Medical News

U.S. Substance Abuse and
Mental Health Services
Administration

“Situation of amphetamines,
Ecstasy and LSD in Europe,”
European Monitoring Centre for
Drugs and Drug Addiction

“New Study Reveals More
than 3 Million Adolescents
and Young Adults Have Used
Non-Prescription Cough and
Cold Medicines to Get High at
Least Once in their Lifetimes,”
10 Jan 2008, Substance Abuse
and Mental Health Services
Administration

写真:

5ページ: DEA;
14ページ: アルバート・ホフマン財団;
15ページ: DEA/
ティモシー・ラリーの逮捕

この小冊子を含む薬物防止教育小冊子のシリーズは、これまでに22の言語で出版され、世界中で何百万部も配布されてきました。新しいドラッグが次々と世の中に回っており、その影響に関する新たな情報が知られるようになっていきます。本シリーズはそうした新しい情報を盛り込んだ最新版です。

これらの小冊子シリーズは、アメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルスを拠点とする非営利の公益法人「薬物のない世界のための財団」によって出版されています。

財団は、その国際防止ネットワークを通して各種教育資料や助言を提供したり、調整を行ったりしています。また、青少年や保護者、教育者やボランティア団体、政府機関ばかりではなく、薬物乱用のない人生を送ることに関心のある人なら誰とでも協力しています。

真実を知ってください：薬物

この小冊子を含む薬物防止教育小冊子のシリーズには、マリファナ、アルコール乱用、エクスタシー、コカイン、クラック・コカイン、覚せい剤、有機溶剤・吸入ガス、ヘロイン、LSD、処方薬乱用についての正確な情報がまとめられており、読者が自分の意志で薬物のない人生を送ることができるように役立つ内容になっています。

さらに情報を知りたい方、またはこの小冊子シリーズのいずれかをさらに
何部かご希望の方は、下記までご連絡ください。



Foundation for a Drug-Free World
1626 N. Wilcox Avenue, #1297
Los Angeles, CA 90028 USA
drugfreeworld.org
info@drugfreeworld.org
1-818-952-5260

薬物のない世界のための財団
日本支部
〒170-0001 東京都豊島区
西巣鴨1-17-5
パークホームズ西巣鴨308
TEL : 03-5394-0284
Eメール : info@drugfreeworld.jp
drugfreeworld.jp